

【日本の大学】第49回——学習院大学：伝統踏まえ、人類・祖国に奉仕

学習院大学は、第2次大戦前までは、戦前に日本にあった華族制度の下で華族の子弟教育を中心に行う学校であったが、戦後は華族制度が廃止され、1949年に学校法人学習院（当初は財団法人）となった私立大学である。

新制学習院大学の開学に当たって初代安倍能成学長は「設立趣意書」の中で、大学の特色として「国際的知識の養成、外国語の練熟と共に世界と国内との生きた現実の理解、さらに進んで文化国家としての日本の遠大な理想たる東西文化の融合」を挙げた。また、教育目標は「ひろい視野 たくましい創造力 ゆたかな感受性」としており、学生の個性を尊重しながら、文理両分野にわたる広義の基礎教育と多様な専門教育を有機的につなげる教育を行っていくとしている。



正門

戦前は華族の教育機関

以下、学習院大学のホームページなどから、歴史と現状をみてみることにしよう。

大学の起源は、江戸時代末期の京都にある。1847年に京都御所の東側に公家の教育

機関として学問所が設置された。49年には孝明天皇から「学習院」の額が下賜され、それが学習院という名称の始まりである。論語の冒頭にある「学而時習之、不亦説乎」が由来とされている。

1877年に、東京・神田に華族学校が開設された。明治天皇の勅諭によって京都にあった学習院の名称が継承された。開業式には天皇皇后両陛下が臨席されたという。学習院大学は、この時をもって創立としている。1884年には、宮内省所轄の官立学校となり、翌85年には四谷区尾張町に華族女学校が開設されている。その後、学習院や華族女学校は移転が続くが、1908年に現在も大学の校舎のある東京府下高田村(目白)に移転している。

第2次大戦の終戦末期の1945年4月、目白キャンパスの校舎が空襲で焼失した。戦後の47年には学習院・女子学習院に関する官制が廃止され、財団法人学習院(1951年に学校法人に)による経営が始まり、学習院と女子学習院は私立学校となった。

新制の学習院大学として開学したのは1949年4月である。文政学部(文学科、哲学科、政治学科)と理学部(物理学科、化学科)でのスタートだった。52年には文政学部を廃止して政経学部と文学部を設けた。政経学部は政治学科と経済学科、文学部は哲学科と文学科のそれぞれ2学科だった。

大学院が設置されたのは1953年である。人文科学研究科と自然科学研究科の修士課程を設けた。57年には文学部の文学科を分けて、国文学科、イギリス文学科、ドイツ文学科、フランス文学科に改組した。61年には文学部に史学科を、63年には理学部に数学科をそれぞれ増設した。64年には法学部(法学科、政治学科)、経済学部(経済学科)を設置し、翌年には政経学部を排した。このあとも、経済学部経営学科の増設(74年)、文学部に心理学科の増設(75年)など学部の学科や大学院研究科に専攻課程を増やしているが、学部の新設は半世紀以上見送ってきた。



目白キャンパス風景

半世紀ぶりに新学部

新たな学部として国際社会科学部(国際社会科学科)が設置されたのは2016年である。この結果、現在は法学部、経済学部、文学部、理学部、国際社会科学部の5学部17学科と大学院6研究科(法学、政治学、経済学、経営学、人文科学、自然科学)と専門職大学院(法科大学院)で構成されている。

国際社会科学部は、広い視野から国際的な発想ができることを活かして、国際的なビジネスで活躍できる人材を育成することを基本の目的としている。社会科学と語学教育を融合させたカリキュラムによって、グローバルな問題を理解し探究するための社会科学的な基礎学力を育み、それを活かしてグローバル環境において活躍できるコミュニケーション能力を育むことを目指している。4年間のうちに4週間以上の海外研修をすることを卒業要件としている。



南1号館。関東大震災の復興計画により、昭和2（1927）年に理科特別教場として建てられた鉄筋コンクリート造りの校舎である。竣工当初から「ドラフトチャンバー」と呼ばれる出窓式の排気装置が設置され、現存している。国登録有形文化財に指定されている。

都心の緑豊かなキャンパス

学習院大学の特色の一つは、1万人規模の学部や大学院の学徒が東京都心でありながら緑豊かな目白のキャンパス1カ所にまとまっていて、多くが少人数制教育を実施していることである。ほとんどの運動施設もキャンパス内にあり、社会・人文・自然科学といった異なる専門分野を学んでいる学生、研究者、教職員が一緒に過ごせる恵まれた環境にあることだ。荒川一郎学長は1キャンパスの利点について「教員は学部の垣根を越えて講義科目を用意する。異分野を融合した講義科目も企画・開講する。他学部・他学科の講義を聴きに行くこともできる。気になっている社会の問題を、学問分野の異なる学生・教員と議論することはきっと有益です」と述べている。

もう一つの特色は、皇室など皇族との関係の深さであろう。第2次大戦前は、華族の子弟を教育する学校であり、戦後は私立学校として出発し、直接の関係はなくなったものの歴代の天皇や皇族の多くが学習院で教育を受けている。最近では、皇族の“学習院離れ”が言われているが、現在でも最も関係の深い大学であることに変わりはない。

学習院では、こうした歴史を踏まえた上で、今後学習院をどのような方向付けをしていくのかについて「未来計画2021」をまとめている。



北別館と紫陽花。北別館は明治42(1909)年に図書館として建てられた建物の一部で、国登録有形文化財に指定されている。現在は大学史料館として使用している。

それによると、戦前の学習院が宮内省管轄の官立学校だったことなどの歴史や伝統を踏まえ、充実した環境と設備の下、外国文化を積極的に受容しながら、基礎基本を重視した幅広い教養を多くの子女に与えてきた。教養と品性を備え、正直で大方的な、学習院らしいと言われる卒業生をさまざまな分野に輩出してきた。戦後に私立学校として出発する際には、「すべて社会的地位や身分にかかわらず広く男女学生を教育することを本旨として、幼児保育から大学教育にいたる一貫した教養を与え、高潔な人格、確乎とした識見並びに近代人にふさわしい健全で豊かな思想感情を培い、人類と祖国とに奉仕する人材を育成することを目的とする」としてきた。

これらを踏まえて三つの柱からなる目標を掲げた。

1 歴史と時代の要請を踏まえた教育改革

創立以来の歴史を尊重し、他校との差別化を図りつつ、ますます高くなるステークホ

ルダールからの要請に応えることで固有の存在感を増すことを目指し、社会全体からより高く評価される学園となるための教育改革を実行する。

2 総合力を発揮するための学校間連携の強化

学習院各校が有する独自性のある長い伝統と、それぞれの特徴を相互に理解し十分に生かしつつ、連携を強化することで総合力を発揮する。地域や産業界との連携も充実させ、社会貢献を果たす。

3 教育の質をたゆみなく向上させるための環境整備

長期的視野に立ち、創立 150 周年を迎えるにあたり、今後も永続的に教育の質を向上させるために必要な、未来に向けた土台作りとなる施策にも取り組む。

国際化への取り組みや海外留学、海外からの留学生受け入れに関しては、国際センターが中心となって行っている。世界の 67 大学と協定を結び、その多くの大学に学生を 1 年間または半年間派遣している。



日本文化体験

外国人留学生に対しては、在留手続き、奨学金、各種行事などの案内やサポートなども実施している。協定校からは年間 20～30 名程度の学生を「協定留学生」として受け入れている。協定留学生は、半年ないし 1 年間、日本語や各自の専門に関連する科目を勉強する。各協定校の国際交流課などを通して行っていて、学生からの直接応募は認めていない。ほかに、外国人学生を受け入れるための入学試験は文学部（哲学科、史学科、日本語日本文学科）や経済学部（経済学科、経営学科）で実施している。

学生数は学部が 8998 名（うち女子 4828 名）、大学院が 461 名（うち女子 241 名）＊専門職大学院を含む。教員数は 1078 名（うち女子 339 名）＊非常勤講師等をふくむ（以上 2021 年 5 月現在）

現在の学長は荒川一郎氏である。1976 年東京大学工学部物理工学科卒。1984 年に学習院大学理学部専任講師となり、1986 年に学習院大学理学部助教授、94 年教授（～現在）、2014 年副学長、2018 年理学部長、2020 年 4 月から学長。専門は表面物理学、真空物理学である。

日文：滝川 進

写真：学習院大学 HP & FaceBook